

## 天声人語

言葉の人なのだろう。初めて漫才のネタのようなものを作ったのは小学校に入る前だった。小学生になるとネタ帳をいつも持ち歩き、何か思いついては書き留めていたという。お笑いコンビ「ピース」の又吉直樹さんが『第2図書係補佐』で書いている▼内省の人でもある。ネタ帳とは別に青春の懊悩(あうなう)を書き込む大切なノートがあった。「僕の生活のリズムは溜息(ためいき)と舌打ちによってのみ出来ている」。10代の頃に書いたこの言葉を後に読み返し、あまりの暗さに驚いたそうだ▼蓄積された言葉の力、内省の力が芥川賞受賞作「火花」に結実した。2人の若い芸人が笑いを追求する愚かしくも真摯(まじん)な日々。とりわけ主人公が師と仰ぐ神谷は、「人と違うことをせなあかん」と奇行を重ねる。その「畢生(ひせい)のあほんだら」ぶりが刺激的だ▼泣く赤ん坊を公園で見かけ、神谷は妙な川柳を聞かせて笑わそうとする。主人公は普通に「いいないないばあ」であやす。自分の流儀を愚直に貫くか、伝わることを優先して相手次第で変えるのか。この違いが後の2人の進路を分ける▼文章にはてらいがなく、静けささえ感じる。題材が題材だから、笑いのポイントも随所に埋まっている。その混ざり合いが不思議な小説世界を形づくり、味わいが深い▼少し前の又吉さんの著書にこうある。ものづくりに触れ、「大人が死に物狂いになって血だらけで作った品にしか金を払う気がしない」。又吉さんが笑いに、そして文学に向き合う時の姿勢でもあろう。